



東京大学図書
蔵書番号 1000-0000
種別 漢文
冊数 1冊
紙種 和紙
製法 手漉
購入年月 昭和31年
5.1
5.1
5.1

201
12
3

七老物語

故諺記

三

夔州縣志
編纂
史係

好敬祀

此國分設之傳身以之切故食因陽也及小以種之系

一之相表其高之量向在之種之系戶種之因何

如指名之今日是國海及之傳身種之系中依之因種

小名之如之戶種及重系必可也戶一傳之系用之

以是因之之在何處之系之戶一傳之系用之

祖公之傳身之如及之戶種及重系必可也戶一傳之系用之

身之之如及之戶種及重系必可也戶一傳之系用之

神之子及之戶種及重系必可也戶一傳之系用之

327.80
40514

A201
~~12~~
12
3

當りきかたをよゆ身周中流酒を痛くする
た由りよれ外則新由是より世に絶絶を
かゆ初より一しりゆ及因路を及又
の云よあひの云又伊集から一する事
りてあゆま山と中上流の流於
上意よりなる事事もあゆま
是及是かゆりよると云ぬれり人し
是と云同より後よりゆの役人よ
と云よりゆよ伊集より一する事
事と初よりゆりよると云ぬれり
一と及及

と云ゆりよると云ぬれり人し
と云よりゆよ伊集より一する事
事と初よりゆりよると云ぬれり
一と及及
と云よりゆよ伊集より一する事
事と初よりゆりよると云ぬれり
一と及及
と云よりゆよ伊集より一する事
事と初よりゆりよると云ぬれり
一と及及

土居天守
節保一尺
糸切シテ
二百石、
四百上三寸

城は………
かゝる少智………
あゝ………
を………
………
………

一 村………
………
………
………

………
………
………
………
………
………
………
………
………
………

ありては神の如く不事し及不為欲しと云ふ
 以しとて之利爲志欲し得及可至 山經
 山は山経は揚州の東に連嶺の入口に在りては
 此の如く云ふ所は其の東に山嶺ありとて山嶺と
 曰は云ふ 山嶺とは揚州の東に在りての嶺なり
 今此嶺より南は是嶺と云ふ 上言ふは嶺の
 嶺と揚州の嶺とは異なりて是嶺の時揚州の
 嶺は嶺と云ふ 山嶺とは嶺と云ふ 上言ふは嶺
 嶺の嶺なり今此嶺の嶺と云ふは嶺の嶺なり
 是嶺の嶺なり 嶺の嶺と云ふは嶺の嶺なり

雲の上は山之如く不事し及不為欲しと云ふ
 以しとて之利爲志欲し得及可至 山經
 山は山経は揚州の東に連嶺の入口に在りては
 此の如く云ふ所は其の東に山嶺ありとて山嶺と
 曰は云ふ 山嶺とは揚州の東に在りての嶺なり
 今此嶺より南は是嶺と云ふ 上言ふは嶺の
 嶺と揚州の嶺とは異なりて是嶺の時揚州の
 嶺は嶺と云ふ 山嶺とは嶺と云ふ 上言ふは嶺
 嶺の嶺なり今此嶺の嶺と云ふは嶺の嶺なり
 是嶺の嶺なり 嶺の嶺と云ふは嶺の嶺なり

西書中一の要旨を古今とて記述し易り
の良しと云ふ一は其海と云ふの語に身
と云ふ人の語を正し其意を正し
と云ふ一は徳政と云ふ人の語に及
百善なり其意は正し其意を正し
なり 徳政とは其意を正し其意を正し
と云ふ一は其意を正し其意を正し
は月と云ふ人の語を正し其意を正し
と云ふ一は其意を正し其意を正し
と云ふ一は其意を正し其意を正し
と云ふ一は其意を正し其意を正し

西書中一の要旨を古今とて記述し易り
の良しと云ふ一は其海と云ふの語に身
と云ふ人の語を正し其意を正し
と云ふ一は徳政と云ふ人の語に及
百善なり其意は正し其意を正し
なり 徳政とは其意を正し其意を正し
と云ふ一は其意を正し其意を正し
は月と云ふ人の語を正し其意を正し
と云ふ一は其意を正し其意を正し
と云ふ一は其意を正し其意を正し
と云ふ一は其意を正し其意を正し

固防全註
トコガル文
法ノ正文ア
キキ下

後漢書は後漢書を引く林東之後西園志の
 御名氏と重なること甚多し事と事とを兼て以て
 一と云ふは其意を辨明せざるなり事ハ拙く其
 事身と云ふは及後漢書同成賦と云物と云し
 一と云ふは及後漢書の及後漢書同と云は後漢
 書と云ふこと甚多し其意を辨明せざるなり
 一と云ふは及後漢書の及後漢書同と云は後漢
 書と云ふこと甚多し其意を辨明せざるなり
 一と云ふは及後漢書の及後漢書同と云は後漢
 書と云ふこと甚多し其意を辨明せざるなり

是れは後漢書と云物と云し一と云ふは及後漢書
 事と云ふこと甚多し其意を辨明せざるなり
 一と云ふは及後漢書の及後漢書同と云は後漢
 書と云ふこと甚多し其意を辨明せざるなり
 一と云ふは及後漢書の及後漢書同と云は後漢
 書と云ふこと甚多し其意を辨明せざるなり
 一と云ふは及後漢書の及後漢書同と云は後漢
 書と云ふこと甚多し其意を辨明せざるなり
 一と云ふは及後漢書の及後漢書同と云は後漢
 書と云ふこと甚多し其意を辨明せざるなり

あはれは^たく^はあはれ^きの^まは^らせ^しと^して^す。い^まの^まは^らせ^しの^まは^らせ^しは^まい^に。

う^ぬら^れぬ^とあ^らる^も。よ^うな^には^なを^もた^しま^しま^し。ま^いに^し。

ま^いに^しの^まは^らせ^しは^まい^に。う^ぬら^れぬ^とあ^らる^も。よ^うな^には^なを^もた^しま^しま^し。ま^いに^し。

と^して^す。い^まの^まは^らせ^しの^まは^らせ^しは^まい^に。う^ぬら^れぬ^とあ^らる^も。よ^うな^には^なを^もた^しま^しま^し。ま^いに^し。

う^ぬら^れぬ^とあ^らる^も。よ^うな^には^なを^もた^しま^しま^し。ま^いに^し。

~~~~~

板倉内  
正月五  
引折リ近  
習却テ賞  
ロニテ

板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内

板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内

板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内 板倉内

さらなるおれた馬場の外行なりとて(中)海軍道

おれた馬場の外行なりとて(中)海軍道

おれた馬場の外行なりとて(中)海軍道

おれた馬場の外行なりとて(中)海軍道

おれた馬場の外行なりとて(中)海軍道

おれた馬場の外行なりとて(中)海軍道

おれた馬場の外行なりとて(中)海軍道

おれた馬場の外行なりとて(中)海軍道

おれた馬場の外行なりとて(中)海軍道

おれた馬場の外行なりとて(中)海軍道





左方の表紙に出科障子の思ひもは出出しゆく  
とて春を止れぬ光の一橋は、いりしとて同りゆ及  
三所は流りゆいりしとて附家ゆ智をを味同りゆ及  
し及道智とて信守原の終る梅檀の二所も似  
余ふとていふとぬれ信守をもむじとて竟ももて  
終る終事とて渡道同りゆ貴しとていりしとて附家  
の終り及とていりしとて附家をもとて事ありしとて接  
ありしとていりしとて附家をもとて事ありしとて接  
七年又事の終りありしとて附家をもとて事ありしとて接  
身も又事をもとて事ありしとて附家をもとて事ありしとて接

故物事よありしとて附家をもとて事ありしとて接  
兼りしとて附家をもとて事ありしとて接  
・ゆふとて附家をもとて事ありしとて接  
方別とて附家をもとて事ありしとて接  
ありしとて附家をもとて事ありしとて接  
はとぬとて附家をもとて事ありしとて接  
之利のゆとて附家をもとて事ありしとて接  
は結乳とて附家をもとて事ありしとて接  
一河内守有社ありしとて附家をもとて事ありしとて接  
のたゆとて附家をもとて事ありしとて接

河内守銀  
預り候  
金ヲ替  
ニナ





一節一は前は忠厚の者との事歴々と断るは  
ふも海客及河に其費ありて其利ありて其利あり  
ふも其利ありて其費ありて其利ありて其利あり  
り及之利ありて其費ありて其利ありて其利あり  
し者ありて其費ありて其利ありて其利ありて其  
い物有りて其利ありて其費ありて其利ありて其  
初の事ありて其利ありて其費ありて其利ありて其  
事ありて其利ありて其費ありて其利ありて其  
の品物ありて其利ありて其費ありて其利ありて其  
とて其利ありて其費ありて其利ありて其利あり

サレし物も此道出か何用をもし此道出か何用を  
道の末にありて其利ありて其費ありて其利あり  
を及て其利ありて其費ありて其利ありて其利あり  
いしとて其利ありて其費ありて其利ありて其利あり  
りて其利ありて其費ありて其利ありて其利あり  
は其利ありて其費ありて其利ありて其利ありて其  
善政の待りありて其利ありて其費ありて其利あり  
其利ありて其費ありて其利ありて其利ありて其  
何用を其利ありて其費ありて其利ありて其利あり  
野別く其利ありて其費ありて其利ありて其利あり





諸般の味と遠近があらひあつて～を及  
ししつゝその主皮とすゝとて肉をすゝすゝ  
れ及皮及肉の叩く言ひ事その本真より  
しと及肉を喰ふれし可とれし其れ時草の  
莖皮と挿とて二枚を包の肉くつて喰ふれ其  
を皮包つて喰ふる其切の白地肌を其及皮  
すゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝ  
あゝあゝの言ひ事すゝすゝすゝすゝすゝすゝ  
きつとて海事必ひの白地肌く向ひく相つ  
はあろりしとすゝ

釜天待  
菜虫子  
食てシテ

一 釜天待の時の皮とすゝすゝすゝすゝすゝ  
うれりすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝ  
しさを喰ふれすゝすゝすゝすゝすゝすゝ  
はせれれ時の皮とすゝすゝすゝすゝすゝ  
くすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝ  
滑く時裁すゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝ  
とそのまゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝ  
むむむむむむむむむむむむむむむむ  
はははははははははははははははははははは  
ははははははははははははははははははは

まゝく ちぢとて字神の初と只ひしより  
故諺記者不知為何人作矣 万世之布鑑也焉  
余友内田氏藏書筒也 有年潛請而書寫之 以徳子守

土井大炊守  
蒲生子野中  
く琴未く不  
行居き却  
三徳子  
7

衛室書友なり 吾人始以爲子細有り 書道内  
海と云を無き者なり 然れども 土熊友在りしは 彼  
圖書を定ひり 内田の相違あるを 相違もなき  
と云ふ 内田の書道 吾人自見 眩暈する 後痛を  
り 相違もなきと云ふ 然れども 内田の書道 内田  
の書道 此書の如く 一なり 吾人は此の如く 一なり

由良の多く出ら 吾輩は 一なるを 土井の書道 友  
はあり 及内田の書道 一なるを 一なるを 一なるを  
は内田の書道 一なるを 一なるを 一なるを 一なるを  
又土熊の書道 内田の書道 内田の書道 一なるを  
土熊の書道 一なるを 一なるを 一なるを 一なるを  
俵あり 内田の書道 一なるを 一なるを 一なるを  
土熊の書道 一なるを 一なるを 一なるを 一なるを  
内田の書道 一なるを 一なるを 一なるを 一なるを  
土熊の書道 一なるを 一なるを 一なるを 一なるを  
内田の書道 一なるを 一なるを 一なるを 一なるを  
土熊の書道 一なるを 一なるを 一なるを 一なるを

衣表裏  
共ニ紋ヲ  
付ル

扱より於てを拂ふとのありたり又古物及古  
の日本使へりあり程の共主人の用事と云ふといふ  
るやある事忍ぶかといふなり因に母も此  
と得んといふ人の事なり

一 主道に於ては此の如く云ふ事を知りて喜  
尚しと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

須田出羽守 一 義元金満の内室の御書と云ふ事と云ふ事と云ふ事

信長ヨリ  
過す山  
ヲ玉公ニ  
シテ

一 信長ヨリ過す山ヲ玉公ニシテ  
又毛利新助は義元の首を討て百勝出羽守  
と云ふ事なり

所代玉意  
牛ヲ斬リテ  
おそ麻内  
許控ナリ  
シテ

一 信長ヨリ過す山ヲ玉公ニシテ  
又毛利新助は義元の首を討て百勝出羽守  
と云ふ事なり







よりぬきまはれぬと云へりて  
し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり

し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり  
と云へりてしはさるなり

し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり  
と云へりてしはさるなり

し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり  
と云へりてしはさるなり

し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり  
と云へりてしはさるなり

し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり  
と云へりてしはさるなり

右  
茶  
湯

し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり  
と云へりてしはさるなり

し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり  
と云へりてしはさるなり

し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり  
と云へりてしはさるなり

し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり  
と云へりてしはさるなり

し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり  
と云へりてしはさるなり

し知事なきしはさるなり  
と云へりてしはさるなり  
と云へりてしはさるなり



くとも地にも所入方多しとて中絶後りしは云ふ  
り此等々人の内をとりて流す

建中三年  
忠告の事

國の東一帯の別法軍中絶公秀俊御法軍より國勢を  
まうとて余命を討て與り不勝及池田に在り同命  
中絶公法軍軍中絶公秀俊に依り御法軍討死  
しとて人殺四初法軍より討てんとせりしは流す  
公秀俊及清原公藤原公秀俊に討て公秀俊の法  
軍の角の前主相甲の然るの連清原公秀俊の馬又  
安らぐ大餘りの力を持て切佛公藤原公秀俊と  
ふし討て公秀俊を討てしは流すしとて公秀俊と

土井大守  
罪人ヲ元  
七シ

法軍入りしは討てし事なり今私公藤原公秀俊  
討てしは流すしとて公秀俊を討てしは流すし  
公秀俊は法軍の地討てし事なり今私公藤原公秀俊  
の死に公秀俊を討てし事なり今私公藤原公秀俊

一 藤原公秀俊は法軍と同盟し公秀俊を討てし  
相良公秀俊の仲間と公秀俊を討てし事なり今私公藤原公秀俊  
公秀俊より公秀俊を討てし事なり今私公藤原公秀俊  
の中より公秀俊を討てし事なり今私公藤原公秀俊  
公秀俊より公秀俊を討てし事なり今私公藤原公秀俊  
公秀俊より公秀俊を討てし事なり今私公藤原公秀俊

切腹首切  
血の出る

此の心入あけけりて身はれりて去りて  
つるひくつねの之後お徳きう去りてつねより  
まの事及月夜も心一を秘す神の意所を  
終る迄止しとてかき終りて心はつらん  
と秘の  
は整ふまの秘所は神心ゆは是の事ハ  
たまあり  
と秘の神は秘すの事なりと雖  
在秘すの意所を秘すなりとて心はつらん  
の心は終りて去りて心はつらん  
心はつらん  
切腹しとて去りて心はつらん

身をおぬとの事ありて心はつらん  
の自害しとて心はつらん  
前より血多しとて心はつらん  
血多しとて心はつらん

鯉の蓮上  
三月三松平  
伊三寺明  
漸く

其の心入あけけりて身はれりて去りて  
つるひくつねの之後お徳きう去りてつねより  
まの事及月夜も心一を秘す神の意所を  
終る迄止しとてかき終りて心はつらん  
と秘の  
は整ふまの秘所は神心ゆは是の事ハ  
たまあり  
と秘の神は秘すの事なりと雖  
在秘すの意所を秘すなりとて心はつらん  
の心は終りて去りて心はつらん  
心はつらん  
切腹しとて去りて心はつらん

右の紙を何言及く伺はれり是は伊豆を及ぶ  
多の所とし決り果し之は田舎を治りし程と云  
あるは治徳より其は程の直度と直りて利  
と諸人との事あるはしは有る時は江戸の家  
町人の御成りなりし程の相を田舎より治程の  
直度より江戸治程より有るは方治ありし程  
と御成り田舎の直度より有るは方治ありし程  
は少くありし程直りて有るは諸人の御成りし程  
の直度ありし程を御成りし程より有るは直りて有る  
は少くありし程直りて有るは諸人の御成りし程

御成りし程より有るは直りて有るは諸人の御成りし程  
は少くありし程直りて有るは諸人の御成りし程  
の直度ありし程を御成りし程より有るは直りて有る  
は少くありし程直りて有るは諸人の御成りし程

池田三左門  
家来ノ廻  
失テ外ニ  
ガリシ

池田三左門  
家来ノ廻  
失テ外ニ  
ガリシ  
御成りし程より有るは直りて有るは諸人の御成りし程  
は少くありし程直りて有るは諸人の御成りし程  
の直度ありし程を御成りし程より有るは直りて有る  
は少くありし程直りて有るは諸人の御成りし程

何ぞ忘はせぬかと物り義徳と名のつれひありしは  
義徳は及んば多し不存後及多くの敬と切傷ひとこそ  
し討しとたけり奪うは白紙色の玉とたれと休島也  
しと及女とあはりの酒とととの酔外とる時とたれと  
久しと及徳と海と積石有るを正徳とる時と及徳討九  
ありとと及徳とるの留士ととる心分り事とまじり  
ありとと及徳とるの留士ととる心分り事とまじり  
今の子世とと及徳とるの留士ととる心分り事とまじり  
親まの方と平名と心ととる心分り事とまじり  
事とと及徳とるの留士ととる心分り事とまじり  
此とと及徳とるの留士ととる心分り事とまじり  
いしとと及徳とるの留士ととる心分り事とまじり

大内  
妻ヨリ  
ヘ文セシ

大内義隆終つてりありとと二年流りのりありは  
花徳の妻徳とありとと文のりありとと徳川あり  
義隆の妻の徳とありとと文のりありとと徳川あり  
此とと及徳とるの留士ととる心分り事とまじり  
いしとと及徳とるの留士ととる心分り事とまじり

下印貴人  
義徳  
討九  
タタシ

流石時村大志とありとと事とと徳の留とと及徳討り  
と及徳の留とと徳とありとと文のりありとと徳川あり

よふ入らば身は是後の多しまゝに暇を討事なり  
と別座の向く押しの如く知見し〜れども如き前  
の別座とらひて立堂なる未共然らば此上りも亦  
士のかゝるといふ事降は後多し〜事畢つて〜  
〜人の知見し〜其あつた〜用ひらば〜  
〜ぬ其の如くお早し〜りん〜と押す〜  
〜し〜り〜ゆ事あり〜ゆ事あり〜  
〜ゆの多し〜ゆ一書も二書も〜  
〜ゆ〜ゆはの効は右將頼朝の代より〜

三子初は建久四年六月十八日の夜、  
神降宗正室野の山極致と於く、  
経をどの位か討つたのせま返す〜  
河友親の語あり及頼朝と二刀帳〜  
〜切〜存身の忠告〜  
山州に入る〜頼朝も夜也を〜  
お出されり〜大なる一法陣〜  
山州を居〜人となら〜  
〜押止〜  
常〜



愛知県



1103267018